
[書評]

『南アフリカ金鉱業史』
——ラント金鉱発見から第二次世界大戦勃発まで』

佐伯尤著

(新評論、2003年、vi + 336ページ)

林 晃史*

I

はじめに評者自身のロンドン大学英連邦研究所勤務期(1984~86年)の体験について述べることを許してもらいたい。その理由は、本書第4章で扱われる論争の主要当事者が当時この研究所におり、いわばイギリスの南アフリカ研究のメッカになっていたからである。まず、S・マークス所長の下に客員研究員としてダイヤモンド鉱業を研究するR・タレル、金鉱業研究のJ・ファン・ヘルテンがおり、S・トラピド・オックスフォード大学英連邦研究所長もしばしばここを訪れた。そして学期中は大学院生も交えて南アフリカ研究会が開かれ評者も毎回それに参加した。ただ評者の関心は第二次世界大戦後の南アフリカの資本主義発展とアパルトヘイト政策の関連にあり、19世紀後半から20世紀初頭にかけての金鉱業の発展や南アフリカ戦争(ボーア戦争、1899~1902年)には直接関心が無く、これら同僚や研究会もいわば宝の持腐れの感があった。

さて、南アフリカは鉱産資源の宝庫であり、就中、世界最大の産金国である。その資源のうち、まず1867年にダイヤモンドがキンバリーで発見され、ついで1886年に金の大鉱脈がラントで発見された。これらが発見され

* はやし・こうじ：敬愛大学国際学部教授 南部アフリカ政治経済論

Professor of African Studies, Faculty of International Studies, Keiai University;
political economy of Southern Africa.

た場所が当時のボーア人の共和国オレンジ自由国とトランスヴァールであったこと、開発にあたったのがボーア人ではなくイギリスを始めとする外国資本であったことが、その後の南アフリカ戦争を引き起こす原因となった。また、鉱山労働者として近隣の植民地を含めアフリカ人が使われたが、戦争後の一時期、中国人年季契約労働者が移入され、また、戦争により農地を追われたボーア人が鉱山に流入しアフリカ人と競合する事態も起こった（ブアー・ホワイト問題）。

本書は金鉱脈の発見から第二次世界大戦までの時期を対象として、資本と労働の両側面から金鉱業発展を解明した日本で初めての学術的研究である。

本書の「はじめに」で南ア金鉱業史を取り上げた理由として、(1)19世紀末以降の金本位体制に立つ世界経済における産金国の重要性、(2)南ア資本主義化のための本源的蓄積としての金鉱業の重要性、(3)アパルトヘイトの起源としての人種差別的権威主義労働システムの重要性をあげている。ついで対象時期をこの時期に絞った理由として、著者は南ア金鉱業史を、(1)金鉱発見から第二次世界大戦勃発までの金鉱業の性格と骨格が確立した時期、(2)1939～70年の継承期、(3)71年のニクソン・ショック以降の変化期の3期に分け、第1の確立期を当面の対象時期とする。さらに、著者は確立期を以下の4期に細区分している。(1)クルーガー政権期(1886～99年)、(2)直轄植民地期と責任政府期(1902～10年)、(3)南ア連邦第1期(1910～32年)、(4)大恐慌下の金本位制崩壊後の南ア連邦第2期(1933～38年)である。

つぎに本書の構成について示しておこう。大きく2部に分かれ、第Ⅰ部は資本面、第Ⅱ部は労働面を扱っている。

第Ⅰ部 金鉱業の展開

第1章 金鉱山開発と鉱業金融商会

第2章 鉱業金融商会とグループ・システム

第3章 金鉱業と外国資本

第4章 ロスチャイルド、金鉱業主と南ア戦争

第Ⅱ部 金鉱業における人種差別的出稼ぎ労働システムの確立

第5章 アフリカ人低賃金出稼ぎ労働者モノブソニー（買手独占）の模索と確立

第6章 白人労働者とジョブ・カラーバー

以下、各章ごとに簡単に内容を見ていくことにしよう。

Ⅱ

第1章は金鉱業の歴史的発展を4期に分けて扱っている。ただこの期間を通して金鉱業開発の中心は「黄金の半円」地帯と呼ばれるセントラル・ランド、ウェスト・ランド、イースト・ランドである。

第1期は露頭鉱山開発から深層鉱山開発への移行期（1886～99年）で、開発主体となった各鉱業主がヨーロッパから資本を導入するため鉱業商會を設立したこと、深層鉱山開発により多額の資金の必要が生じ、鉱業商會が鉱業金融商會に転化され、鉱業金融商會と鉱業主の支配従属関係が確立したこと、金鉱業主はダイナマイトの高価格などでトランスヴァール政府に不満を抱いたこと、全コストの約3分の1を占めるアフリカ人労働者賃金の引下げと労働者獲得のために鉱山會議所を設立したことに触れている。第2期は低品位鉱業確立期（1902～10年）で、アフリカ人労働者不足を補うため中国人年季契約労働者を導入したこと、深層鉱山開発の進展に伴い鉱山合同が起こり、7大鉱山グループが形成されたことが述べられている。第3期には労働過程再編とファー・イースト・ランドへの重心移動期（1910～32年）で、金の固定価格制から起こった危機に対し、金鉱業主は金価格プレミアムで対抗したこと、白人労働者の1922年のストライキ（ランドの反乱）に対しウェット型ジャック・ハンマー・ドリルの導入による労働過程の効率化で対抗したことを述べている。さらに高品位のファー・イースト・ランドの開発は7大グループの順位に大きな変化をもたらした。第4期は金本位制崩壊による金鉱業ブーム期（1933～38年）で大恐慌下での金本位制崩壊が金鉱業に与えた影響を分析している。

第2章は南ア金鉱業に特有のグループ・システムを分析している。グルー

プ・システムとは金鉱山会社は法的に独立した存在でありながら、経営の重要事項に関して常に鉱業金融商会の指導・監督を受けていること、すなわち、鉱業金融商会は発起・管理・金融の面で金鉱山会社を支配していることをいう（pp. 77～78）。ついで鉱業金融商会の収益面を、(1)株式売却収益、(2)配当収益、(3)手数料収益の3面から分析し、結論として配当収益が最大であること、手数料収益が平均30%を占めていることを明らかにしている（p. 105）。

第3章は金鉱山への時期別・国別投資額を明らかにしている。S・H・フランケルの古典的研究以後の諸研究により、南アフリカ・ゴールドフィールズ社とヨハネスブルグ・コンソリデイテッド・インベストメント社グループはイギリス資本、コーナー・ハウス・グループはイギリス資本とフランス資本、セントラル・マイニング・インベストメント社とゲルツ商会グループはドイツ資本が多く、全体ではイギリス資本80%、大陸資本20%としている（pp. 117-119）。また1917年に設立されたアングロ・アメリカン社（AAC）グループは南アフリカ資本とアメリカ資本により、30年代南ア最大の鉱業金融商会となった。

第4章は、これまでの3章の分析を踏まえ、マーチャント・バンカーであるロスチャイルドが南ア金鉱業にいかに関わっていたのか、南ア戦争がどうして起きたのかを巡り、従来の諸説を検討・批判しており、本書の核心部分と言える。

まず、J・A・ホブソンは『帝国主義論』でC・ローズとロスチャイルドの結びつきを指摘し、ロスチャイルドが南ア金鉱業を支配していたと主張する。すなわち、ローズはダイヤモンド独占体デビアーズ社創設に際し、ロスチャイルドの協力を仰ぎ、その独占利潤によって金鉱山開発と特許会社（BSA）を設立したとする。さらに鉱山会議所グループが共謀してイギリス政府を動かし、南ア戦争を引き起こしたとする。

つぎに古典的研究とされる生川栄治の『イギリス金融資本の成立』（1956年）では、イギリス資本輸出の3類型、すなわち、(1)生産過程への原始蓄積系統、(2)商品流通過程吸着系統、(3)利子生み資本へのレントナー系

統を提示し、南ア金鉱業投資は第1類型とした(同書 p. 293)。さらにマーチャント・バンカー—特許会社—デビアーズ社—鉱山金融会社集団—鉱山会社の順に重層的・連結的支配構造があることを明らかにした(同書 p. 303)。これに対し、本書の著者は鉱山金融会社集団—鉱山会社の支配構造以外認められないとし生川説を批判した。

ついでS・D・チャプマンはマーチャント・バンクは保守的でリスクの高い投資は極力回避したとしたのに対し、R・タレルとJ・ファン・ヘルテンはロスチャイルド等金融業者が関与したエクспロレーション社を掘り起こし、その活動を調べ、南ア金鉱会社の発起事業を明らかにした。

さらにファン・ヘルテンは南ア産金と国際金本位制との関連の分析、すなわち、イングランド銀行の南ア産金による金準備の問題に研究を進め、ロスチャイルドのロンドン金市場での金の精錬・販売の役割を明らかにした。このファン・ヘルテンの研究を受けて、井上巽もロンドン金市場でのロスチャイルドの役割を重視し、生川説を擁護した。

ついで南ア戦争原因に対するJ・A・ホブソンの南ア金鉱業主共謀説に対する否定説として、J・S・マレー、ル・メイ、I・スミス説が紹介され、本書の著者は「共謀は存在しなかったが、イギリス政府の政策を支持する十分な理由が存在した」(p. 198)とする。ファン・ヘルテンが金準備に対する不安が戦争を引き起こしたとしたのに対し、S・マークスとS・トラピドはそれを否定し、トランスヴァール政府がイギリスの競争国(ドイツ)と同盟を結ぶかもしれないという「帝國的利益」が原因であったとした。これに対しファン・ヘルテンは金準備の重要性を再度主張し、A・ポーターもこれを支持した。

ついで第Ⅱ部の労働面の分析を紹介しよう。第5章はアフリカ人労働力確保と賃金引下げのために金鉱業主がいかに対処したかを、(1)鉱山会議所を通じての労働力調達の一元化と賃金引下げ、(2)国家への働きかけを通して最終的なアフリカ人低賃金出稼ぎ労働者モノブソニー体制が確立していく過程を分析している。時期は第1章の区分と違うが4期に分けている。第1期クルーガー政権期(1886～99年)では、隣国モザンビークのボ

ルトガル政府との協定によりロレンソ・マルケス港使用の見返りに毎年10万人程度のモザンビーク人出稼ぎ労働が確保され、金鉱山全労働力人口の2分の1～5分の3を占める体制が創られたこと、逃亡、引抜きを防ぐため特別パス法が制定された。第2期直轄植民地期（1902～06年）では、一元の募集機構WNLAの設立、モザンビークとの現状維持協定の調印、ミルナー南ア高等弁務官の金鉱業政策とその下での中国人年季契約労働者の導入、キャンベル＝バナマン政府によるその廃止が分析されている。第3期責任政府期（1907～10年）は、ヘット・フォルク責任政府による中国人送還とその代替としてのプアー・ホワイトの採用が分析されている。第4期南アフリカ連邦期（1910～30年）は、連邦新政府のアフリカ人労働力調達機構としてのNRCの設立、その成果としてのアフリカ人低賃金出稼ぎ労働者モノプソニー体制の確立が述べられている。

第6章は金鉱業における白人労働者を優遇するジョップ・カラーバーの成立と展開を分析している。ジョップ・カラーバーは当初安全確保のため導入されたが、中国人年季契約労働者導入の際の職種リストが、その後も継承された。一方、南ア戦争後のプアー・ホワイトの流入により白人の「脱技能化」が進み、法的措置の必要性が増した。さらに第一次世界大戦により白人労働者が不在化した間、ジョップ・カラーバーは侵食され、第一次世界大戦後の不況期にラント反乱となって現れた。政府は武力により反乱を弾圧したが、白人労働者の反感は増し、24年に国民党と労働党が連立したヘルツォーク政権の成立となった。政権はジョップ・カラーバーを確立した。

III

以上、簡単に本書の内容を紹介してきたが、本書はこれまでの南ア金鉱業史に関する多くの文献を渉猟し詳細に分析した極めて実証度の高い学術研究書である。従って本書の内容をこのように要約するよりは読者が本書そのものにあたることをまず勧めたい。

特に第I部の資本面の分析は、著者のイギリスでの一次資料探索の成果

が良く反映されているように思う。とりわけ、鉱業金融商会と鉱山会社との関係、グループ・システムの解明、これまで定説化していた生川説への実証に基づく批判、ロスチャイルドと南ア金鉱業、南ア戦争への係わり合いをめぐる一連の論争の整理は本書の白眉である。

以下、望蜀の願いを含めて若干のコメントを記そう。

第1にデビアーズ社に代表される南ア・ダイヤモンド鉱山開発の実態に本書は全く触れていないが、ダイヤモンド鉱山開発で成功した企業が続いて起こった金鉱山開発に参加したことを考えると、ダイヤモンド鉱山開発で行われた資本・労働形態が何らかの形で金鉱山開発にも投影されているのではないだろうか。

第2に同じく鉄道建設にも全く触れていないが、内陸部ラントでの金鉱山開発にとって必要資材の供給、鉱山への食糧供給は極めて重要な問題であり、南アフリカ各港からの鉄道、キンバリーとラントを結ぶ線の拡張、最短距離のモザンビークのロレンソ・マルケス港との鉄道建設はトランスヴァール・ドイツとの関係も含めて言及する必要がある。

第3に現在、南アフリカ最大の金鉱業会社はAACである。本書にも1917年創設のAAC社については簡単に触れているが、その後のAACの発展を考えると、AACの動きをもう少し追う必要がある。ただし、AACの研究としては既にT・グレゴリー、D・イネスの詳細な研究が出版されている。

第4に第4章でロスチャイルドの役割をめぐる論争の詳細な紹介があるが、生川説に対する著者の明確な批判に比べ、チャプマン、タレル、ファン・ヘルテン、マークス、トラピド説に対する著者の立場が不明瞭である。もっとも、このためには国際金本位制の問題にまでふみこまねばならず、南ア金鉱業史の研究の範囲外になるかもしれない。しかし、金が特殊商品であることを考えると、やはり、この問題を無視するわけにはいかないだろう。

第5に第Ⅱ部の労働面を扱った第5・6章は、第Ⅰ部の資本面を扱った第1～4章に比べオリジナリティが少ない。その理由として、第5章は主

に N・レヴィと A・ジーブスの研究、第 6 章は主に E・カッツ、F・ジョンストン、D・ユーデルマンの研究（それぞれ優れた研究である）に依拠し、それ以上に出ていないためであろう。せめて、これら研究の対立点を明らかにし、著者の考察を加えて欲しかった。

以上、はじめに述べたように望蜀の願いの多いコメントとなったが、本書は南ア金鉱業史に関する優れた学術研究であり、今後、同問題の研究を志す研究者にとってこれを乗り越えなければならないピボタルな研究といえよう。